

三地点における語形差とその表現差異

－ 下津井言語研究から －

そ ご な き
十 河 直 樹

1. はじめに

- 1 個人によって、地域によって語形は異っている。それはまた、表現の上からも差異を見ることができる。

下津井（倉敷市下津井田の浦）で、ただ一人調査の焦点をしぼり、その人の話すあるいは理解している語をすべて採集しそれを分類整理し、その一人の言語体系をとおして下津井の言語社会を見ることができるか。

- 2 一人の人でさえ、その人の生きる時代と社会変化とで、多少の語彙変化がある。同時に、その地域内でも、職業あるいは性別、趣味といった点にも体系には微細にユレをもたらす。

そのことは、同時に表現体系にも言えると思われる。語の転訛がかなりの時代が必要な様に、その転訛された語を使って表現するセンテンスも同様なことがいえる、と思われる。

- 3 すなわち、語形変化と表現変化とは相対立しながらも、一方では心理的に働きあって、たがいの助成をはかりつつほうかいしていく表現体形を保とうとしている。

- 4 ここでは、そういった語とそれに関する表現について、三地点について実施調査したものを報告したい。なお、内容の肉づけの意味もあって、二・三他の語・表現についても同様に掲示した。地点も、さらにもう一地点ふやし四地点で調査したものを表示することにした。

2 調査にあたって

- 1 本調査は下津井（倉敷市下津井田の浦）についての言語体系を目的としているため、下津井を中心として南に浮ぶ香川県丸亀市本島。及び、丸亀市（内）この三地点を重要な地点とし、岡山県側として、倉敷市児島味野に一地点補足のために調査することとした。

- 2 各四地点に一名ずつとし、当地はえぬき三代目の人を対象者にあたってもらった。

- 3 職業に、あるいは性別などの問題点、及び、本人の生育過程の間の兵歴とか長期の旅行といった点については特に注意をはらい、なるべく共通年代及び職業も漁業者を中心にした。

この点は、先で説明することになるが、一語を選んだその一語が漁師の最も興味のある点にある。

- 4 項目の一語は語形・音形・及び表現の明確に異うものを選出することにした。ここでは、こういった調査をすることの意味に多少とも不安さもあって、名詞を選び、その名詞も特徴的な生物、アメリカザリガニ【America 蜷蛄】を選定した。

表1

県 側	字 名	氏 名	年 令	職 業
岡 山 県 側	児 島 味 野	古 谷 槌 松	7 5 歳	元中学校長
	下 津 井	石 田 源 吉	7 6 歳	漁 師
香 川 県 側	本 島	山 坂 芳 吉	7 6 歳	漁 師
	丸 亀 市	西 岡 秀 市	7 3 歳	漁 師

3. 三地点の語形の差異表

- 1 まず、アメリカザリガニ（America 蜷蛄）の絵を見せて、「この生きものは何と言いますか」とたずね、その人の知っている用い方すべてを記録していくことにした。

表2 A アメリカザリガニ【America 蜷蛄】

	名 称	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀	○ の 数
1	トーチカ	○	○	○		3
2	トーチカエビ		○	○		2
	アメリカザリガニ	○		○		2
	ザリガニ	○	○	○	○	4
3	ザリガネ		○		○	2
4	ザリガリ				○	1
	○ の 数	3	4	4	3	14

- 2 表2では、四地点四人の方が使用している名称をすべて記録し、それを表示した。

この表から、アメリカザリガニ（America 蜷蛄）をいい表わす名称には都合六称ある。このうち、トーチカ系（トーチカ・トーチカエビ）とザリガニ系（アメリカザリガニ、ザリガニ、ザリガネ、ザリガリ）の二つに分けることができる。そして、極端な点は、本島と丸亀の二点で明確な差異が現われている点である。

- 3 実は、丸亀の被調査者が特別な人であった訳ではない。現在七十歳代の方は、標準語形であるアメリカザリガニといった呼び方を知らないのである。

- 4 また、この表からだ、四地点ともに呼称されているのはザリガニであってザリガリは丸亀の一点だけである。頻度の点とか優勢劣性といった点についてもこの表だけでは解らない。

4. 三地点の表現から見た差異

- 1 岡山市内とか倉敷市内では、「ノミガサバル」（蚤が体にくいつく）といった意味の表現をする。「コーモリ ワ トリ ジャ」と言う人もかなりいるし、「トマト ノ キ」（トマトの木）と言った使い方あるいは「フロ オ タク」（風呂をたく）と言った表現はとりたてた表現会話ではない。したがって、

「トーチ ガ カニ ジャ」(アメリカ鰯姑は蟹だ)と言った表現をしても別におもしろくもおかしくもないのである。

しかし、その表現はそのまま瀬戸内海を渡った丸亀とか、丸亀と言った島の生活者の対話の中では使わないし、コ首をかしげると言ったことを知ったのである。

■2 そこで、表2のところで四地点六称を①四地点すべてに共通した語形(呼称)はのぞき、②また、標準語形もはぶき、いわゆる④四地点中三地点で呼称される⑥標準語形ではない名称についての表現方法について、できるだけ多くの表現を得て表示することにしたのである。

A ■ a 「アメリカザリガニ ワ カニ」 ○ = である 表3
× = ではない

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
1 トーチカ ワ カニ	○	×	×	
2 トーチカエビ ワ カニ		×	×	
3 ザリガネ ワ カニ		×		○
4 ザリガリ ワ カニ				○

■ b 「アメリカザリガニ ワ オヨグ」 表4

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
1 トーチカ ワ オヨグ	×	×	×	
2 トーチカエビ ワ オヨグ		×	×	
3 ザリガネ ワ オヨグ		×		○
4 ザリガリ ワ オヨグ				○

■ c 「アメリカザリガニ オ タベル」 表5

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
1 トーチカ オ タベル	×	×	×	
2 トーチカエビ オ タベル		×		
3 ザリガネ オ タベル		×		○
4 ザリガリ オ タベル				○

■ d 「アメリカザリガニ オ ツル」 表6

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
1 トーチカ オ ツル	×	×	×	
2 トーチカエビ オ ツル		×		
3 ザリガネ オ ツル		×		○
4 ザリガリ オ ツル				○

■ e 「アメリカザリガニ ワ ハネル」 表 7

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
1 トーチカ ワ ハネル	×	○	○	
2 トーチカエビ ワ ハネル		○	○	
3 ザリガネ ワ ハネル		○		○
4 ザリガリ ワ ハネル				○

■ 3 アメリカ蠍(ざりがに)についての表現を都合五つ表示した。この五つの表から一・二の推理をはたらかせることができる。

- 1) 四国丸亀での表現は、本土倉敷市児島味野のでの表現とまったく差異を明示している。
- 2) それは語形のところでもすこし触れた様にアメリカ蠍に対する見解が異う。と同時に外の物の見方にも同じことはいえる様な気もする。
実は、そのテストケースは二、三ある。

実例 一

「カブトガニ ワ カニ」 別表 1

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
5 ホーロクガメ ワ カニ		○		
6 ドンガメ ワ カニ		○	○	
7 カブトガネ ワ カニ		○	○	○

「カブトガニ オ トル」 別表 2

	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀
5 ホーロクガメ オ トル		×		
6 ドンガメ オ トル		×	×	
7 カブトガネ オ トル		×	×	○

- 3) その実例の一・二を表示しておいたが、この外にも丸亀市内での表現と岡山県側の表現の間にはかなりの差異のあることを発見している。
- 4) ここでの×○のない地点の人は「解らない」と言った表現をしたことである。即応しかねたことである。

実例一・二の解説

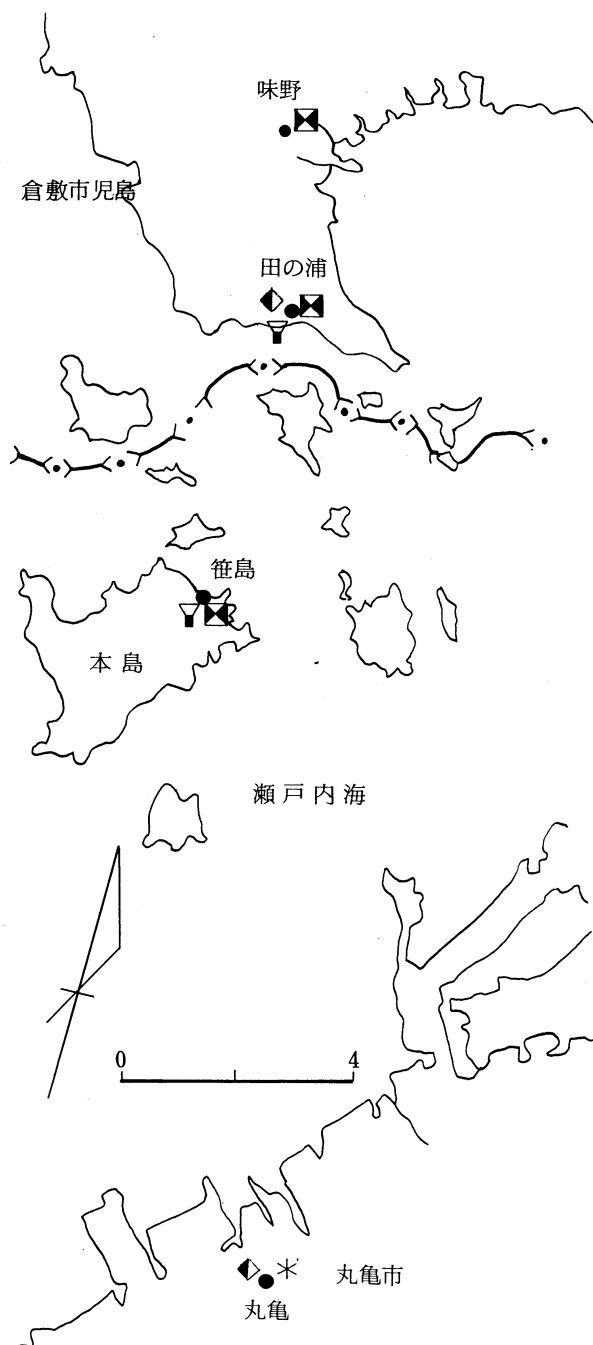
別表 1 で、 = カニと表現する地域は味野以外の四国側に圧倒されている。

別表 2 で、それを補足する様に、丸亀一地点を残して、古い語形(ホーロクガメ・ドンガメ)を用いた = トルといった表現はユレ、新しい語形カブトガネと = トルといった生活から滲んで出た表現のドッ

キングが生きて活用されている点に注目したい。

5. 分布と区画図（その一）

アメリカザリガニの分布図



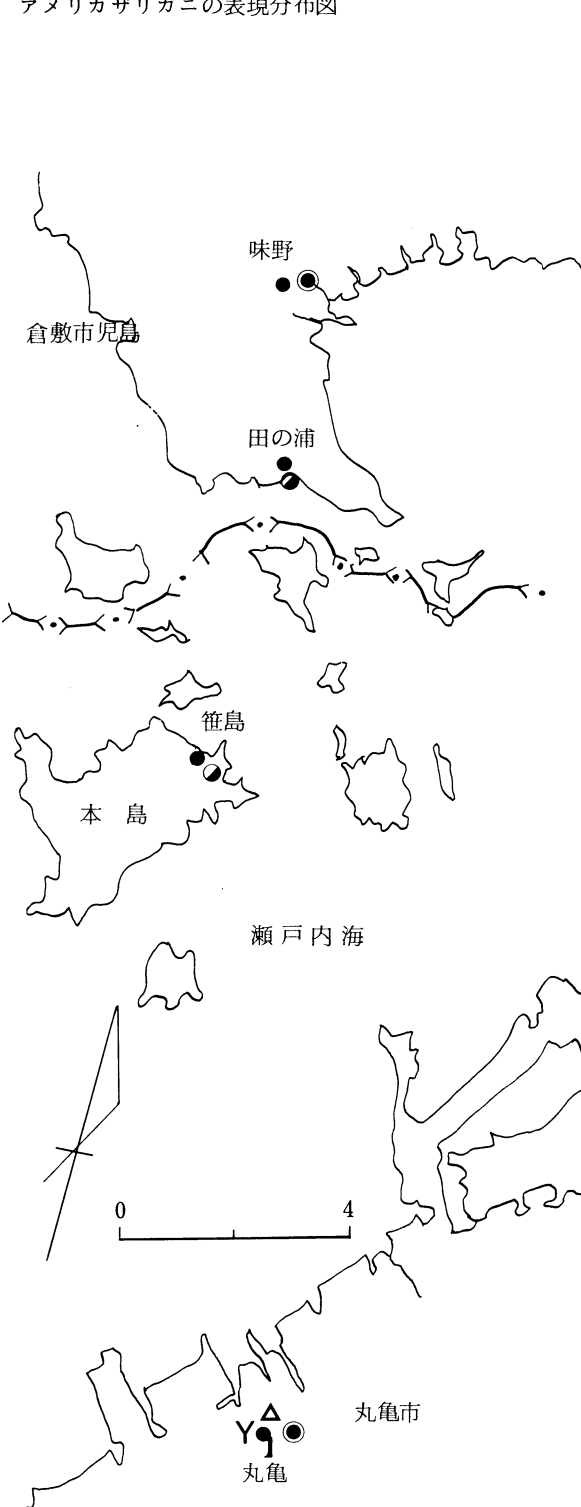
凡	例
◼	to:tʃika
◽	to:tʃikaebi
◄	zarigane
*	zarigari

■ 1 to:tfika 系 (トーチカ・トーチカエビ) は岡山県側の使用名称であり岡山市・津山市でも使っている。したがって北から南へ侵入に語形。

■ 2 zari 系（ザリガネ・ザリガリ）は、
四国・香川県側の使用称で、高松・坂出・
多度津なども用いている。いわゆる標準語
形称の簡略称である。

■ 3 この二に分けられた分派から、岡山県側は、生活に即した物としての名称のとりえ方ではなく、その生き物の生棲を観察する、といった二次的なもののとりえ方をしている。トーチカといった、戦線での陣地をなぞらえた点がそれをものがたっている。対する香川県側のザリ系は、その生き物を正面から直接に見て、それを生活の中でいかして使っているため、語形そのものが標準語を基準としたもので、その語尾に変化のある程度といった語形であり、語そのものも少ない。

アメリカザリガニの表現分布図



凡 例	
a	● 蟹(かに)
b	Y 泳ぐ(およぐ)
c	J 食べる(たべる)
d	△ 釣る(つる)
e	● 跳ねる(はねる)

■1 この分布図から、下津井・本島は、表現でユレている。混動していると言ってよいかも知れない。そして、味野(あじの)と丸亀(まるがめ)とで明確な区画線をひくことができる。

■2 この見方で、語形の分布図と比較すると、

	味 野	下津井	本 島	丸 亀
語 形	○	○	○	×
表 現	×	×	×	○

上の様なことがいえ、語形からは、本島は岡山県側の語形が優勢であるのに対し、表現の力も丸亀までで出足がにぶっていることが理解できる。

■3 すなわち、蟹であり、泳ぐ、そして食べるし、釣る、という表現につづく丸亀の人の心情は、語形のところで述べた様に直接的な見方であり、生活に直結していることが推せる。

6. 分布と区画図（その二）

四地点の語形・その表現による差異図

	語形差	表現差	累計
			—
	2	a	正
	1	e	
	3 4	b c d	正

7. む す び

- 1 語形から
 - ・下津井・本島の語形は共通性（または点）が高い。
 - ・この二地点の関係は、かつては船による生活関係が高く、通婚関係のかたちは下津井とは密接。生活物資の供給源としては本島は現在も下津井と深い関係にある。
 - ・語形が豊富である。このことは、かつてこの語が非常に頻用されていたことを暗示できる。
 - ・俚言が残存（優力）／標準語形が消滅（劣勢）
 - ・三地点中 本島の語形が微弱。
- 2 表現（形体）から
 - ・下津井・本島での表現が共通。しかも高い。
 - ・下津井での表現が岡山表現（岡山・倉敷圏を中心とした）におされ、やや微弱化傾向。
 - ・丸亀での表現に興味があるため、丸亀を中心とした四国本土での表現分布状態を調査する必要性が今後の課題。
- 3 分布状態と区画図から
語形の分布及び表現の分布から、つぎの様な区画線累計表ができる。

表 8

県 側	岡 山 県 側		香 川 県 側		
地 点 名	味 野	下 津 井	本 島	丸 亀	
語 形	1	3	2	2	8
表 現	1	3	2	10	16
線 の 数	②	⑥	④	12	24

○で囲まれている数字には意味がない。すなわち、語形と表現とが共通しているため、その世界は一つである。

- 4 表 8 から、四地点の語形・その表現による差異図と比較してお解りの通り。
語形からは 味野(1)下津井(3)本島(2)までには大差がない。そして、表現の点からの差異を分布図や表で明確に理解できる。すなわち、味野と下津井で一つの区画ができ、下津井と本島の区画はうすい。そして、本島と丸亀との区画を数的に見ても 2：10で、丸亀での表現と下津井・本島での表現の世界に一区画濃い、高い区画壁のあることを実例で知れる。
ただ、見方の一つとして、丸亀での累計された数字が高い意味を表示しているのは、他の三地とは別の表現を用いるためであり、他の三地と共通してさらに丸亀だけ特有な表現をする、という意味の数字ではない。

- 5 最後に、この四地点四人のはえぬき三代目の人を対象に、一語についての名称を主語（主部）として表現調査を試みた。本研究のねらいは、①生きた言語地理学の発見にある。②すなわち、語形での

分布と語形の変化による語の歴史では把握しがたい点、あるいは面、たとえば、「ノミ ガ サバル」（蚤が体につく）といった表現と、単にノミという一語とでは、標準語形であるノミ（蚤）といった名称は、ほとんど言語地理学の課題語としては注目されないままに次の世に移動する。

しかし、「ノミ ガ サバル」という表現を聞いて、オヤ？と思う様に、その表現からの分布図を作図することにより、生きた表現学の分布図と同時に、生活会話（生活言語）社会の一端を知れると思ったところに、本論のねらいがあった。

■ 6 本調査は、下津井での一人の人の語彙調査をしている途中で、発見した表現の点と地域差との妙味を科学的に分析した試論である。

1975. 12. 11